

とも受け取れます。町議會議員、青年団長その他団体の役員をしてゆく間、人には言えぬ苦しみ悩みを抱えて、昔の苦しみを思いだし、何くそと頑張り、苦境や難局も打開克服した尊い思い出も、すべて一言で申せば海軍魂のおかげと肝に銘じております。

海軍は滅びました。しかし海軍魂は未だ健在です。

昨近の何とも言えぬ世相に鑑み、若い日本人に魂の教育を重んじて欲しいと切に祈ります。

海軍従軍記

愛媛県 清水 政栄

私は大正十一年三月二十七日、愛媛県上浮穴郡久万町の生まれで、昭和十八年八月十七日佐世保へ入団（現役）しました。

当時の私の家庭の状況は、父母と長男の私、第三人、妹七人の十一人の子供の大家族でした。

農業を営んでおり、水田の三反、畑五反、山林は七

町で、杉林が主で雑木林も少しありました。

さて、海軍へは同郷の壮丁三人同時入団で町内の三島神社へ集合、祈願祭の後私が代表で挨拶をし、久万町より松山市内へバス、船で広島へ汽車で佐世保へ出ました。戦後の結論ですが、三人すべて無事生還しました。めでたいような申し訳ないような。

佐世保では、私一人汽缶の方へ、他の二人は水兵ということで別れ別れです。海兵団の新兵教育は三カ月間。毎夜整列してお尻へ精神棒をたたき込まれます。一人でも悪いと団体責任でやられます。お尻が黒くなって、入浴の場合はタオルを巻いて隠したものです。その外に洗濯物を盗まれるという苦勞もありました。自分の物以外に古兵の物、班長の物いろいろです。靴下一枚無くなっても大変。周知のことながら、員数合わせは恐ろしいこと。

盗まれたら盗み返せとは言いますが、皆盗まれぬよう警戒しているし、もし見つければただでは済みません。あれやこれやの難関を乗り越え、悪条件を克服して行かねば。とにかく洗濯物では毎日必死の綱渡りの

気分です。そのうち、私なりに考えて、船の底の汽缶は駄目だと決めて、班長さんが沖繩出身の方でしたが申し出て、横須賀の工機学校を希望し許可され、昭和十九年一月二十七日横須賀目指して佐世保から新兵二十人同行出発しました。

横須賀工機学校と言えば、ドイツの潜水艦学校と併び称される世界に冠たる地獄学校と入校早々おどされました。冬期の厳寒に毎朝五時起床、一時間はだして砂浜を駆け足の毎日です。それが終わると入浴があり体を温められて助かりました。ここでも三カ月間猛訓練です。

従軍の全期間を通じて、工機学校の三カ月が最も苦しかったと思います。毎夜の精神棒は勿論、実習中に不都合があると上の人からその場にあるスパナとかハンマーとかで頭を打たれ、時として不運な学生は頭部裂傷も出る始末。とにかく地獄でした。

昭和十九年四月やつのことで卒業出来ました。ところが学校を出ても乗る船が無く、待機しているうち

に、五月七日長崎県大村航空隊へ仮入隊と決定。大村には一カ月いました。

大村では電気とカマ（汽缶）に分けられました。私はカマは嫌いだだったので電気に入れられました。広い大きな配電室に沢山の配電盤その他計器類がズラリと並んでいます。「これから説明をする。よく聞いておけ。今夜から配電盤の当直だ」と言って説明が始まります。新兵ではあるし、十人ぐらいの同年兵が全員目を白黒。とにかく当直に立つ、すぐ完全に任務が出来ない。毎晩整列。精神棒。普通に立っていると棒の力で吹っ飛ばされるので、壁に向かって両手で体を支えて棒を受ける。現在の若者は辛抱出来るでしょうか。海軍魂の気合入れ。経験した者でないと判りません。

一カ月して、船が入るといので佐世保の第一海兵隊へ帰隊しました。約一週間待って「第二十三号駆潜艇」乗り組みを命ぜられました。艇は約三〇〇トン、長さ五〇メートル、大尉以下一〇〇人乗り組みです。ホキ室（電気）へ配属。四〇キロワットの発電機二台を回して艇内へ電気を送る任務です。加えて水（真水

で炊事用)の管理も受け持っていました。電気と水を持ってるので、他の部所の者が種々の上産品を持参しては挨拶にきました。艇に乗ってよかったと嬉しく思いました。持ってくるまで電気も水も送ってやらない。呵々。

艇に乗り組んでやつと上等兵となりました。やれやれです。はじめは二等兵で次は一等兵、そして上等兵と進級します。その上は二等兵曹、一等兵曹、上等兵曹です。私は終戦時二等兵曹となりました。いわゆるポツダム二等兵曹です。

新兵教育期間中のことですが、常に班長さんから銃剣術や相撲の試合の時「必ず敵の陣地に攻め込んでやれ、勝ち負けは時の運。決して自分の陣地内に攻め込まれぬように頑張るべし」と言われ、これが座右の銘のようでした。

いよいよ第一回の航海です。時に昭和十九年九月か十月の頃です。佐世保で十三隻の商船に、兵員、食料、弾薬を積み込み一応台湾の高雄へ。約五日ぐらい

で高雄着。二日間くらいさらに食料等を積み増してマニラへ向け出港。夜でした。今にして思えばその当時日本軍の通信は全部米国軍に傍受されていたのか、待ち伏せにかかって七隻の商船が敵の潜水艦の魚雷で沈没。日本軍は五隻の駆潜艇で十三隻の商船護衛でしたが、敵潜の待ち伏せにはかきませんでした。

駆潜艇には爆雷と高角砲を積んでいます。爆雷を投下して対抗しましたが、その効果は不確認です。静かな航行中に突然ドッカーンとの大音響とともに大きな火柱が上がり、最初に五隻、次の回に二隻、計七隻を失いました。夜襲撃されて朝になると、海面に浮かぶ日本軍を救助します。竹製の筏には二十人乗って「勝ってくるぞと……」と大声で歌っています。上に乗れない者は筏のロープに掴まって、これも大声でやっています。そのほか海面いっぱい兵員が浮いています。

駆逐艇の乗員で当番の連中は、敵の飛行機が来ると高角砲で、敵の潜水艦には爆雷で攻撃するので任務を離れられません。非番の者が救助に当たるのです。水

面から引き揚げても、既に死亡者が多く、生きている者には手足の骨折や火傷で苦しむ者が多くいました。死亡者は丁重に水葬にします。負傷者は治療しますが、数が多くて思うに任せません。戦場とは生き地獄でした。

ようやく、ほうほうの態で残りの6隻がマニラへ着きました。マニラ港には第一、二、三と突堤がありました。日本の突堤は既に沈められた艦船がそのままに接舷水没しているので、新しく入港した船はどうにも出来ません。私等の船団はどうか一本の突堤に接舷が出来ました。

日本側の報道は「勝った、勝った」と言っていました。飛行機も艦船も敵軍が圧倒的で「日本軍の方は一体どうしたのか？ 負けている気がする」と、陰でひそかに心配しました。戦後知ったことですが、大本营発表は真面目で真実であったのか？

我々駆潜艇で第一回の航海に出るに当たり、高雄で遺髪、私物、最後の私信等を命令により「残しておけ。別の船便で内地へ送り返してやる」とのことでした。

た。ところがその大事な物を積んだ別使の船も敵潜にやられたとの由。内地の留守宅では便りが長い間ないので、てっきり戦死だと諦めていました。

あれこれして年末に高雄へ帰りました。迎春準備の一つとして爆雷を投げ込むと、運良く鯛の大きいのが沢山浮いてくれました。豪勢な正月料理を喜んだことを覚えていきます。

船団護衛の場合、商船は一三ノット程度、駆潜艇は三五ノット。敵潜に狙われやすく、飛行機の攻撃も多かったので、多くの損害は誠に痛ましいものでした。

高雄に在るうちに「ここも危ない。上海へ基地を移す」とのこと。護衛する船はもう無いので付近の警戒が主たる任務。ここで水兵が一人逃亡する事件がありました。後で聞いた話では大分月日を経て捕らえられた由で、その後の処分その他一切不明ですが、生やさしいことでは済まなかったことは十分想像されます。死ぬる覚悟でご奉公すれば何とか無事終戦出来たのに。可哀想に！ これは仲間全員の意見です。

た。

そのうち、上海も危ないとのことで青島へ移りました。ここでも危ないのであまり外洋へは出られません。しばらくして終戦となりました。

終戦まで青島では短刀を作りました。する事もないので銘々に短刀作り。これはその後米兵に全部没取されました。刃物と言えば髭そり用の剃刀までとられました。

青島で私は筋肉炎を患いました。新兵教育当時の精神棒の後遺症？ 大学病院へ入院、軍医の手術を受けましたが、麻酔をかけずに受けたので、痛かったの、辛かったのって。軍隊ならではの戦中ならでは！ 現在こんなことは経験出来ないことです。一週間ぐらいで治りました。一カ月はどして帰国の用意をせよとの指示。病院にいる約五〇人は大喜びでした。

米軍の上陸用舟艇に乗せられ、一番底へ押し込まれました。真っ暗で舟はどっちへ行っているのか、昼か夜か幾日経ったか一切不明のまま、浦賀へ上陸。敵重

な消毒、検査ののち、七〇〇円と米三合、そして乾パンを貰い列車に乗り故郷へ。車窓から見ると沿線の都市は空襲で破壊、焦土ばかりの祖国日本でありました。一体これからどうなるのか。不安と窮乏とインフレに困らされたことです。

体験のある方は理解出来ると思いますが、苦しい列車旅行を続けました。あの戦後の旅行の殺人的混乱はまさに、死に物狂いでした。昭和二十年十一月二十七日夜、松山着。松山も戦災都市で勝手が判りません。ハテ、どうしたものかと思案するうちに、妹が松山市内へ嫁入りしているのを思い出して、あちこちで尋ね歩いて夜道を妹宅へ辿り着きました。幸いにもその家は奇跡的に焼けないで昔懐かしく建っていました。

コツコツと入り口の戸をノックしました。返答ありません。もう寝入ってしまったか？ 諦めずに尚も続いて強くノックを繰り返す。「誰じゃ？ こんな夜遅くに！」と義弟の怒り声。「ワシじゃ。久万の兄じゃ。やっとなさっき松山へ着いた。すまんが開けてくれや」「エッ！ 久万の兄さん！ 生きとったんか！」

と妹夫婦二人して走って来ました。「よかったよかった。早うお入り。腹空いとんじゃろ。今急いで食い物作るきん！」と喜んで迎え入れてくれました。ありがたいものでした。

翌日はいよいよ故郷の久万町へ。バスは木炭車が走っています。バス停では沢山行列して待つており、「私の順番は今日中のことになろうか？」と心配して立っていました。丁度、久万から松山へ木材を積んだトラックが来ました。昔の仕事仲間が偶然私を発見、車を止めて「帰ったか。ここで待つておれ、帰り便に乗せて帰るから」とのことです。友達の親切で夕方には久万へ帰着。

一時間歩いてやっと我が家へ。昭和二十年十一月二十八日夜九時三十分頃でした。入団以来二年数カ月ぶりの帰宅です。しかも元気で。私の声を聞き付けて、先ず父が半信半疑で出て来るや、私の姿の上から下まで入念に見届けて「よう生きとった。もう死んだと諦めていた。何しろ葉書一枚届かんからのう」と固く抱き締めてくれました。後ろを向いて「兄が今元気にも

んだぞ。皆早く出て来い」と大声で叫びます。数多くの妹や弟が皆飛び出して来ました。母は入浴中であつたとか。裸で走り寄って涙声で抱いて喜んでくれました。これが復員完結の瞬間です。今はその父母も亡くなりました。でも十一人の弟と妹等は全員元気で頑張っています。戦後久万の実家は三男の弟に任せ、私は松山市内へ移住し現在に至ります。

考えれば同年兵も沢山戦死したのに、私は生き残り、今日まで生かしてもらい、日本も戦後の貧困から現在の立派な国に復興して、毎日平和で繁栄の生活です。これ以上のことは贅沢で、今のままで感謝せねばならないと自分の心に言い聞かせております。

海軍第五十二警備隊

北方の守り

富山県 松島 米次郎

私たちが小学校に行く頃は、靴や鞆などではなく本